

飯島賢二の 『恐縮ですが...一言コラム』

第 456 回 小澤征爾さんとの思い出

2012 . 1.22

「水戸芸術館(水戸市)は20日、指揮者の小澤征爾さん(76)が体調不良のため、この日に予定されていた水戸室内管弦楽団定期演奏会の指揮を取りやめたと発表した」(2012/01/20 共同通信)～心配なニュースが目にとまった。

私がまだ学生の頃、小田急線の成城学園前に住んでいた。
そのそばに小澤征爾さんの家があった。
小澤さんは成城学園高校出身で子供たちも成城の初等科へ通学していた。
その担任は私のクラブ(オーケストラ)の先輩で、彼から頼まれたまに、面倒みていた。
といっても、一緒に飲んだり食べたり、遊んだだけだ。
娘の征良ちゃん(現:エッセイスト)と息子の征悦君(現:俳優)である。

私が大学4年間アルバイトをしていた喫茶店があった。
「田園」と言う名の喫茶店は、たぶん大正時代の「ミルクハウス」、そんなイメージの
お店で、古くから住んでいる成城セレブに愛された成城の名店だった。
どんな有名人でも全く意識せず、同じサービスを淡々とやる「田園」のママに、むしろ気
がおけたのか、多くの知名人が「田園」の珈琲を楽しんでいた。
閉店すると決まった時、かの朝日新聞が惜しむべく記事を書いた。

そんな喫茶店に小澤さんはたまに顔を出してくれた。
私が所属するオケは、生意気にも「レストロアルモニコ」(L'estro armonico、調和の幻想)と
称した。そこでオーボエと指揮をしていた私だが、演奏は決して上手くない。
そんな我々のオケにも、小澤さんは寄ってくれた。
アマチュアを集めて「成城合唱団」を作り、指揮をしてくれた。
恐ろしいことに私も、テナーとしてその末席を汚(けが)していた。
小澤征爾さん、自他共に認める「成城ファミリー」であった。

オーケストラ関係のアルバイトもやっていた。
だから、岩城宏之、若杉弘、朝比奈隆、森正、秋山和慶ら当時の名だたる名指揮者
たちの練習風景、ゲネプロは、すべて見て知っている。
しかし小澤征爾さんの練習は、彼らのそれとは全く違っていた。
小澤さんが姿を現してから、膨大な時間が経過する終了まで、小澤征爾さんのエネル
ギーが衰えたことはなかった。鳥肌が立つほどの緊張感がすべてを支配し、自分の能
力の限界をはるかに超えた「圧倒的な音楽」が創造されていく、そのプロセスは圧巻で
あり、類を見ないリハーサルは、未だに伝説となっている。
だから私は、小澤征爾の音楽こそ、日本人の誇りであると思っている。

小澤征爾さんとの縁は、ひとかたならぬものがあると、勝手に思い込んでいる。
今は切に、一刻も早いご回復を、祈るだけである。